「日々の理科」(第 1065 号)　2017 (H29),-6,-6

「テントウムシの羽化（２）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

本校の校庭にあるミカンの樹では、テントウムシのサナギがたくさん見つかる。大抵は葉の裏側についているが、表のことも、時には茎にも見つかる。種類によって表面の模様が少しずつちがうようだ。

これは採集してから数日たったサナギである。いつ羽化しても、教室に逃げ出さないように、小さな蓋付きシャーレに葉ごと入れてある。葉は乾燥して萎びてしまうが、特に問題はない。

更にその数日後、子どもたちがまたもや大騒ぎを始めた。「テントウムシのサナギが動いてるよ！」「羽化するんだよ、もうすぐ！」「羽化の一瞬が見れる（見られる）かも知れないよ！」

テントウムシのサナギは、お尻側が葉の表面に固定されている。羽化の時期が近付くと、しきりに頭側を繰り返し持ち上げる行動が見られるようになる。「サナギはじっと動かない」と思い込んでいる子どもたちにとって、「サナギが動く」ということは、驚き以外の何ものでもなく、「サナギも間違いなく生きている」ということを実感できる一瞬なのである。

子どもたちがサナギの異変に気づいてから 30 分ほどで、テントウムシの羽化が始まった。まさしく、生き物は子どもたちの期待通りに振る舞ってくれた。殻の最前部を破って、頭から這い出してくる。この時も子どもたちの何人かは、「カサカサって音がする」と話していた。殻を破る音なのだろうが、残念ながら、私には全く聞こえなかった。